市民学芸員活動報告　平成27(2015)年3月　第11号

みはら玉手箱

平成26年4月27日（日）に開講した「平成２６年度 市民学芸員講座」は、10ヶ月のカリキュラムを全て終了し、平成27年1月18日（日）、めでたく閉講式を迎えました。

平成26年度市民学芸員講座

閉　講　式

1. 開会挨拶　；　教育部長
2. 講演会　「城下町絵図を活用した　iPhone ・iPad　アプリによる地域学習」
   講師　鳥取県立博物館　主任学芸員　来見田　博基氏
3. 各グループによる活動・感想発表；　情報発信Gr、収集Gr全3班、体験Gr、養成講座全3班
4. 今年度講座の振り返り　；　文化課
5. 市民学芸員養成講座の修了証書授与
6. 平成27年度の実践講座予定　；　文化課
7. 閉会挨拶　；　三原市文化財協会会長　橋本敬一先生

（終了後、別会場にて、交流会）

〔来見田　博基氏〕

平成26年度　各グループの活動・感想発表

1．情報発信グループ

教育委員会文化課のホームページの「みはら玉手箱」という欄で、市民学芸員の活動状況や、三原市内の祭り、各種石碑、狛犬等の伝統行事や史跡紹介を担当しています。平成26年度は第８号、第９号、第１０号まで発行済で、平成２７年３月には第１１号の発行を予定しています。

〔清川教育部長〕

2．収集グループ

三原駅～広島駅開通120年を記念して開催された　”山陽鉄道ものがたり”展は、平成26年7月18日～8月10日の会期で開催され、準備・受付・解説・跡片づけ作業で、市民学芸員は延べ196人が支援しました。中でも収集グループは中心的に活躍しました。

又、「古写真班」は本郷・大和・久井の地域に範囲を拡げて収集中であり、「宮本常一氏の古写真班」は前回の展示に続く第２弾の準備中との報告がありました。

〔橋本敬一先生〕

3．体験グループ

「第２回三原城下町ウォーク」「生涯学習フェスティバル」「甲冑を着て見よう」等々、教育委員会文化課主催の各種イベントにおいて、準備・受付・現地解説等幅広く支援をしたとの報告がありました。

平成２７年３月29日に実施される「国史跡　新高山城跡見学会」でも、現地解説等で支援予定とのことです。

4．養成講座　三つの班

三つの班が順番に登場し、一年間受講の感想や現地研修の裏話・苦労話等を紹介しました。皆さん一様に、この講座に参加出来たことへの感謝と満足感を述べていました。

〔養成講座三つの班の発表〕

橋本先生からは、閉会挨拶の中で、市民学芸員が２年間執筆担当した広報みはら最終頁の「親子で学ぶみはら玉手箱」のお陰で、現地訪問者が増えたとの労いのお言葉がありました。

みはら　おもしろクイズ

（解答は次頁の欄外にあります）

復活！　三原だるま

右の写真が、広報みはらの平成27年2月号や、新聞の地方版でも掲載されました。当時のこども達が張子のだるまをかぶって東町の通りを練り歩いたそうです。そして、今年、”復活！三原だるま”として三原小学校３年生等の頑張りによって、見事60余年ぶりに復活し、下のような記念撮影ができました。

この復活に至るまでの足跡を、三原観光協会が克明に記録されていたので、その資料の一部を紹介させていただきます。

〔昭和20年代後半に東町で撮影されたとされる写真〕

〔平成27年2月6日　25体のだるまを3つの班総勢75人が交替でかぶり行進した〕

１．復活作業開始のきっかけ

昨年３月、東町の元住民の方が、右上の白黒写真を一枚、三原観光協会に持ち込まれました。三原のまちおこしで様々なアイディアを検討中の観光協会は、行事の復活に向けてただちに行動に移りました。

2.　「復活！みはらだるま実行委員会」の設立

三原だるま保存育成会をはじめ、三原小学校、多方面のボランティアや県立広島大学生等から賛同と協力の目途がたち、昨年10月、「復活！みはらだるま実行委員会」が設立されました。

3.　張子だるまの作成（作業会場；山脇邸および三原小学校　作業開始；平成26年11月）

［張子だるまの骨組みとなる竹ひごは、伐採した竹を割って作る］

〔骨組完成見本〕

〔張子だるまの構造説明会〕

［骨組み作成で、保護者も応援］

［新聞紙の貼り付け］

［上紙の貼り付け］

〔親子で色塗り〕

〔面相書き〕

〔勢揃いした張子だるま〕

張子だるま行列のコース

13時10分　三原小学校出発

↓

神明市露店の間を東進

↓

神明大橋東詰でかぶる生徒交替

↓

昭和園で小休止
かぶる生徒交替

↓

立町通り南端で記念集合写真
（クラス単位）

↓

14時20分頃
神明市東詰の神殿前が終点

〔だるまの両脇に交替要員〕

〔大勢のｶﾒﾗﾏﾝも必死に撮影〕

［行列のしんがりは、県立広島大学生が大だるまで締める。大だるまには児童の願いや思いの書込がぎっしり］

〔昭和園で小休止〕

おもしろクイズ

60余年ぶりに復活された張子だるまの行列。多くのボランティアに支えられて実現しました。写真のように全て手作業で出来上がり、３年生は勿論、先生や保護者にとっても貴重な体験になったことでしょう。だるまのまち三原の大切な財産にしたいものです。

さて、三原小学校３年生は２クラスで総勢７５人です。途中二回の交替で全ての生徒が一回かぶって練り歩くために張子だるまは何体作成されたでしょうか？　ヒントは本文にあります。

(ｱ)　10体　　(ｲ)　25体　　(ｳ)　75体

クイズの解答　　（ｲ）

三　原　の　お　祭　り

金剛寺護摩法要・火渡り修行

〔石段を上った山門〕

田野浦、青葉台団地の下を川沿に奥に進み、道を左に折れ、谷筋の細い道を上っていくと、真言宗御室派（おむろは）金剛寺があります。ここは毎年1月半ば（現在は成人の日に固定）が大祭で、「護摩法要」それに続く「火渡り修行」が行われます。今年は1月12日でした。護摩とはサンスクリット語の「ホーマ」からきて〈焚く〉〈焼く〉などを意味し、真言密教の秘法だそうです。護摩法要や火渡り修行は、市内の他の寺でも実施されていますが、今回は田野浦金剛寺を訪ねました。

ところで田野浦には「田野浦八十八ヶ所霊場巡り」というのがあります。これは江戸時代末期に田野浦村の金剛寺と眞観寺の老僧２人が四国八十八ヶ所を巡礼した際、各寺のお砂をお印として持ち帰り、田野浦村全域に大師堂を建てたことが始まりといわれています。その大師堂を巡礼する習わしは今も地域の人に守られています。中世小早川所領の沼田荘時代から明治時代まで、田野浦村は北は沼田川から南は久和喜、有龍島までの広いエリアでした。この田野浦八十八ヶ所巡礼道で金剛寺は第四十五番目になっています。

〔本堂での護摩法要〕

下の駐車場に車を止め、石段を上がると境内に出ます。そこに結界が切ってあり、護摩木を井桁に組み、檜葉で覆った護摩壇が用意されていました。屋外で行う護摩法要を柴燈護摩（さいとうごま）」というそうです。

いよいよ法螺貝を合図に儀式が始まり、午前中本堂で行われた護摩火が柴燈護摩の壇（以下護摩壇）に点火されました。読経の中、激しく燃え上がった護摩の炎の中を修験者が一気に駆け抜けました。また、「湯加持」も行われ、身を清めるため、参拝者や駐車場の車に大釜で煮えたぎった湯が、笹の葉でふりかけられました。やがて護摩壇の炎が収まると護摩木が一枚一枚火中に投込まれました。これらの炎が納まると読経が響く中、無病息災、家内安全、商売繁盛などの願いを込め、厄除けを祈願しながら修験者や参拝者が素足でその上を歩いて渡っていきました。

〔点火された護摩壇を渡る修験者〕

〔火渡りする修験者〕

護摩の火は不動明王の智慧の火、火を渡ることでご本尊と一体になり、念願成就のご加護を頂き、さまざまな不浄や災難を焼き尽してもらえるそうです。

筆者も護摩の火のパワーを頂き、清々しい気持ちで一年のスタートを切ることができました。

石碑が語る三原の歴史

今回は前々号で取り上げた西野町から、井屋峠（いやんたお）を越え西に向かう、中世からの街道を訪ねました。干拓が進み、江戸時代寛永年間には、仏ヶ峠（ほとけがたお）を通る新街道が整備されて利用されるようになったためこの旧街道は整備されることなく、後世に残されることとなりました。
しかし、この古くからの街道を利用する参勤交代の大名もいたそうです。頼山陽もこの道を利用しています。大きく迂回する新道よりも、難所ではあるけれど、井屋峠を越える近道といったところでしょうか。

記念碑

［井屋峠（いやんたお）大改修記念碑］他

西野の地から旧街道を西進、峻険な山道を登りきったところに、これらの碑が立っています。右端の碑は昭和39(1964)年沼田町民の宿願を受け、大改修された時の記念碑です。
その隣の地蔵菩薩像と記念碑は、昭和２(1927)年11月、中元次郎さんの遺志を継ぎ、妻ヨシさんが発起人となって二間の掘下げ工事をした時のものです。現在ですら喘ぎながらの峠越え、「鎌倉の切通し」を想起しながらもそんな甘い感傷も吹っ飛ぶほどに険しいものです。往時の山陽街道を往来する者にとって最大の難所であったことでしょう。

道　標

［　四辻の道標　］

石柱部拡大

北　薬師堂まで十二丁　奥は平畑官林（稗畠）
東　約一里にして三原町に至る
西　三次道に通じ佛通寺へ一里三丁
南　十六丁にして県道に通じ忠海まで三里九丁

［東を向いた面に全方向が刻まれた道標です］

険しい井屋峠（いやんたお）を越えるとすぐ沼田川の支流の本谷川に沿って、国道二号線に向かう市道との交差点に立っています。高さ116cm横２８cm×１７cmの道標で、下部は鉄板で包まれています。おそらく交差点の角に位置し、隣に防備のため侍らせたのであろう傷だらけの鉄柱を見るに、過去交通事故により破損していると思われます。

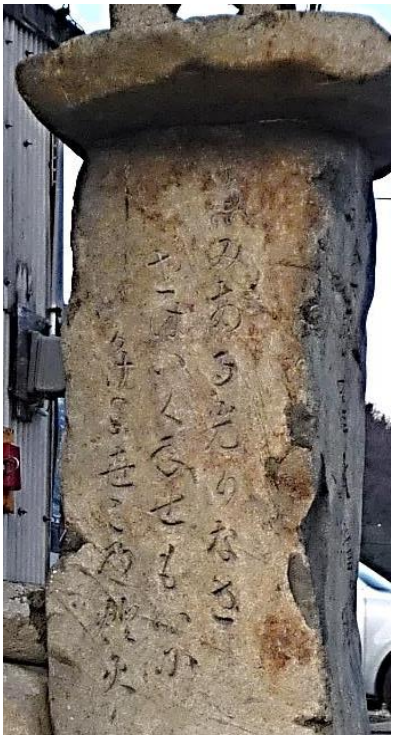
大正6(1917)年10月に、地元沼田下（ぬたげ）の青年団によって立てられたと横面に刻まれています。今でもこの四差路は道の狭い割には交通量が多いようですが、車社会になる前、昭和初期までは、[北]沼田下（ぬたげ）の薬師さんと呼ばれ信仰されていた薬師堂に参詣する人々や、[東]三原町に向かう人々や、[西]佛通寺に参詣する人々、[南]県道に出て川船を利用する人や、沼田の祇園社や忠海に向かう人々で旧道とは言え、街道の面目を堅持していたことでしょう。

土地の方に伺うと、秋ともなると佛通寺に参詣する人々が「ぞろぞろとアリコの行列のようじゃった」そうで、その人々を目当てに梨や柿を売る店も出ていたそうです。

この本谷川沿いの沼田には、ことに寺社が多く見受けられます。一番北の薬師堂から南に向かって、三原市の天然記念物「ムクノキ」の大木二本を擁する二位神社をはじめ、三原市重要文化財木造多門天立像のある円城寺、その奥の金吉稲荷社(金吉（かねよし）さん、神社の社内には、奈加野神社と書かれた木札もある)、大番神社（石燈籠には黄幡神社の文字）、円城穀神社（今伊勢宮とか、いまいしさんと言われ、最近の地図には今井石神社との記載例あり)、熊野神社、光正寺と一見しても三寺五社を数えます。薬師堂には三原市重要文化財の薬師如来坐像があり、光正寺奥院ともされていて仁王門には金剛力士像がにらみを利かせています。ほとんどの社寺は10～１３軒の氏子さんや檀家さんで護持されているとのこと、地元の方々のご苦労が偲ばれます。何処も同じく高齢化と、薄れゆく宗教心のなか、護ることの難しさを感じます。

句碑・詩碑

燈籠［奉燈　金毘羅大権現］



［同左の南面］

恵みある光りなさ
をばいく年せも心尓
うけよ世こ乃燈火

［解読困難な文字は、中迫政一著「沼田町の今昔」を参照した］

この燈籠は道標のすぐ隣にあります。高さ１６５cm横５５cm×６０cmの柱石に刻まれたもので、燈籠の総高さは３５０cm近くあるようです。

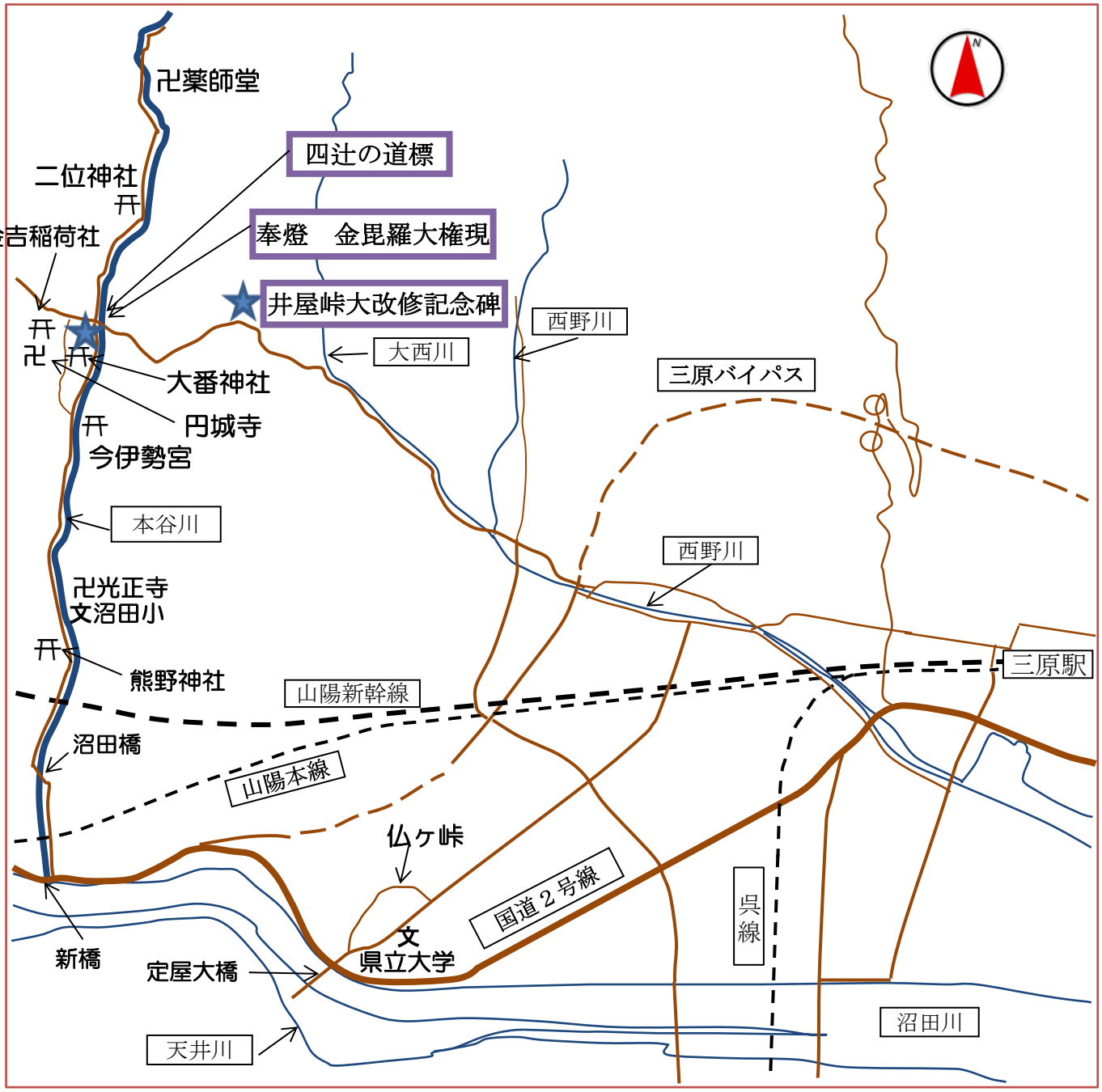
江戸時代より金毘羅信仰は大変盛んだったそうです。この燈籠はそんな世相を背景に「弘化五才申春」といいますから1848年江戸末期に建立されています。

「祈　谷中安全」と側面に刻まれており、毎日旗を各戸に次々回していく当番制で燈をともし、谷中の安全を祈りながら、昭和初期まで続いていたそうです。

因みに「長谷」の語源は長い谷、この沼田（ぬたげ）下本谷川沿いの長い谷と言われています。この地の字（あざ）は「稲積（いなづみ）」ですが、現在「沼田二丁目11」という無粋な表示板がありました。

この燈籠、先の芸予地震でも微動だにしなかったそうですが、道路拡張に伴って移設される予定とか。１７０年にも亘って街道をゆく人々を見守り続けた名誉ある場所から引退の時が来たようです。

概略マップ


卍薬師堂
四辻の道標
二位神社
⛩
金吉稲荷社
奉燈　金毘羅大権現
井屋峠大改修記念碑
⛩
卍
⛩
大番神社
円城寺
⛩
今伊勢宮
西野川
大西川
三原バイパス
本谷川
西野川
卍光正寺
文沼田小
⛩
熊野神社
三原駅
山陽新幹線
沼田橋
山陽本線
仏ヶ峠
国道２号線
呉線
新橋
定屋大橋
文
県立大学
沼田川
天井川

三原にある狛犬

今回は、沼田東町の狛犬を紹介します。（神社の由緒説明文は広島県神社誌等によります）

２２．軍（いくさ）神社　　三原市沼田東町末広宮之内

天正15（1587）年、小早川隆景公の造立とされています。「当社は武術賢徳の神なり。小早川公、尊崇ありて軍量を祈らしめる」と神社誌に記されています。

（単位：cm）

	高さ	幅	奥行
阿形	77	37	56
吽形	81	42	61
年代	寛政　9(1797)年５月		
石工	尾道　和助		
石材	花崗岩		
型	お座り型		

２３．沼田（ぬまた）神社　　三原市沼田東町本市

清和天皇貞観年間（859～877年）の859年より前の創建といわれます。当時、疫病が流行し貧困に苦しむ沼田の里に、武塔神（スサノオノミコト）が老翁となって現れ、村人に沼田川の水を引き入れて田を作るよう進言があり、その通りにすると疫病が鎮まり田も豊作となりました。

村人はスサノオノミコトに感謝し、この地に社を建立したと伝わります。

（単位：cm）

	高さ	幅	奥行
阿形	71	37	56
吽形	72	42	61
年代	嘉永　7(1854)年８月		
石工	番佳介		
石材	花崗岩		
型	玉乗り型		

２４．小方島（おかたしま）神社　　三原市沼田東町片島

元慶年間（877～885年）より前、国造景光（くにのみやっこかげみつ）が沼田八郷の総社と称し創建したと伝わります。片島への創祀には、八幡大神の使臣から、杉3本を探すようにとのお告げのあった景光は、その大樹を探し求め、そのかたわらに社を建てたとの伝説があります。

［鳥居脇］

（単位：cm）

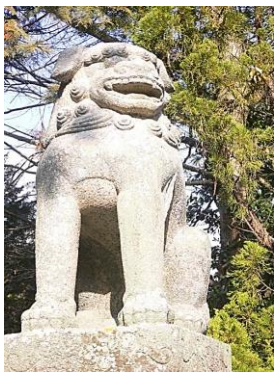
	高さ	幅	奥行
阿形	93	35	77
吽形	93	35	77
年代	明治15(1882)年８月		
石工	糸崎　森猪兵衛		
石材	花崗岩		
型	構え型		

［鳥居脇］

［神殿前］

（単位：cm）

	高さ	幅	奥行
阿形	85	40	70
吽形	85	40	68
年代	天明6(1786)年２月		
石工	尾道　丈助		
石材	花崗岩		
型	お座り型		



［神殿前］